

第3回 北九州市小中一貫教育検討会議【会議要旨】

1 開催日時

令和3年3月19日（金） 10:00～12:00

2 開催場所

小倉北区役所 西棟5階 504会議室

3 出席構成員

12名（対面：8名、オンライン4名）（構成員定数：12名）

4 次第

（1）議事

- ① 小中一貫教育に関する最近の動きについて
- ② ヒアリング（札幌市）
- ③ 論点等について

5 会議経過

座長 早速ですが、議事を進めたいと思います。

まず、小中一貫教育に関する最近の動きについて、事務局から説明をお願いします。

根橋計画調整担当課長より説明【資料1】

座長 ありがとうございます。

事務局からの説明に関して、ご質問・ご意見があればお願いします。

それでは、私から確認です。今の資料1の7、8ページに、小中一貫教育を行う学校の推移ということで、コメントでもグラフでもありますが、施設分離型が増えてきているということに関わって、この読み取り方なのですが、これは母数が小中一貫教育を行う学校ということで、すべての学校ではないので、施設分離の状況であっても小中校一貫教育を始めたので分離型が増えていて、分離型として小中校一貫教育を整備しているということではないというふうに理解していいですかね。

事務局 小中一貫教育校、学校教育法施行規則で定められているものを設置するためには、教育委員会の規則等で制度化する必要があります。

おそらく、そのような制度化した学校がこういう形で増えてきているという形ですが、初めの頃は一体型・隣接型でやっている、隣接型は多くないのですが、一体型でやっているケースが多かったと思うのですが、最近新しくつくっているところについては分離型が多くなっているという形かなと思います。

一応、小中一貫校かと聞かれれば、分離型であっても小中一貫校という形になります。

座長 その他、ご質問やご意見等あればお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、続きまして、札幌市からのヒアリングになります。

本日は、札幌市教育委員会からご参加いただいております。

今回ヒアリングを行う趣旨や簡単なご紹介を事務局のほうからお願いします。

事務局 本日ヒアリングを札幌市さんをお願いしたのは、令和2年2月に札幌市さんのほうで基本方針を策定されたと。

現在それに基づいて取組を進められているというようなどころがありますので、我々としても非常に参考になるのではないかとというふうに考えまして、ヒアリングのお願いをいたしました。

座長 ありがとうございます。それでは、札幌市様お願いいたします。

札幌市 札幌市教育委員会教育課程担当課長の佐藤と申します。よろしくお願いいいたします。

今日ご説明させていただく内容について、まず確認したいと思います。札幌市では、小中一貫した教育基本方針を定めて取組を進めておりまして、その策定の経緯、これが1点目です。

2点目が基本方針のポイント、特にパートナー校の取組、あるいは小中一貫校の検討といったところについてです。

また3点目は、今後のスケジュールということで、お話をさせていただきたいと思います。

まず、お手元の資料に概要版というものがあろうかと思えます。資料2です。

まず、資料の説明に入る前に、札幌市の小学校・中学校の状況ですけれども、小学校が198校、中学校が97校ございます。

97校の中学校区に様々な小学校校区がくっついている形であり、北九州市と同じかもしれませんが、複数の小学校から、複数の中学校に進学するという状況が概ね一般的になっております。

後で詳しくご説明したいと思えます。

まず、基本方針の策定にあたって、私ども札幌市教育委員会では、平成22年から研究校を指定して、まずは小中連携の研究を進めてまいりました。

これを踏まえて、平成27年度には、「小中連携の手引」に、その成果・課題などを取りまとめて、札幌市の方針を固めてきたところです。

この小中連携による取組については、一般的な出前授業ですとか、子ども同士の交流ですとか、あるいは中学校の先生による理科とか英語の出前授業ですとか、子どもたちは中学校で体験するようなものを自然に小学校のうちから経験する、そういった取組が主流となっていました。

ただ、この連携した取組の中では、いずれも小学校と中学校のつながりに目を向けたものが多く行われ、小学校6年生と中学校1年生のつながりといったものに着目した取組が主だったものとなっていました。

また、小学校が198校もあるものですから、それぞれの地域や学校において、主体的な取組を進めるとか、あるいは9年間の連続性・系統性を意識した取組につなげるまでには、なかなか難しいという学校の声も多くありました。

このような状況の中、私たち教育委員会として、どのようなことを進めていったらいいのかということの中でも議論してまいりました。そこで、ヒントを得たのが、今、うしろに可愛らしいキャラクターがありますが、これは地球と本と雪をモチーフにしておりまして、札幌市では札幌らしい特色ある学校教育として、「雪・環境・読書」の3つを全市で共通して取り組もうということで進め、札幌らしい特色ある学校教育の推進方針というものを、平成22年度に策定をして、そこから取組を始めてまいりました。

札幌市教育委員会として悩むところは、すべての教育活動がやは

り学校に任せるといところが基本になるのですが、札幌市全体で共通して進めるべきものもやはりあるだろうと、そこをどうやって示していくのかということが当時課題としてありまして、雪・環境・読書というのは、札幌市にとっては、重要な取組なので、全市で共通して取り組もうということで進めてまいりました。

なぜこの話を差し上げるかという、このあとの読書について、平成22年から取組を進めてきた成果として、実は読書好きな子どもたちが大変増えました。読書好きの子どもたちの割合を申し上げますと、平成20年、小学校で72.1%、中学校で68.7%だったのが、全市共通の取組として進めたところ、平成24年度には、小学校が76.3%で、4.2ポイントアップ、中学校がさらにアップしたところで、75.5%、6.8%アップでした。

こういった成果がありまして、やはり全体で取り組んでいくことによって、成果が出てくるものもあるということを実感したところではあります。

学校の主体性に任せる部分と、札幌市教育委員会がリーダーシップを発揮して進めていく部分とが、やはり両方必要だということを実感したところではあります。

こういった成果も踏まえまして、小中連携についても、さらにつなぎ目の部分だけではなくて、9年間連続して系統性のある教育活動を進めるために札幌市として大きな方針を出すべきだという考え方に基づいて進めてまいりました。

お手元の資料2、基本方針の全体概要について説明させていただきます。方針の概要版の左側、第1章、第2章の辺りをご覧ください。できればと思いますが、基本方針を策定するに当たり、小中一貫した教育についての在り方検討委員会を立ち上げました。保護者の方、校長先生方、大学の先生方に参加していただきまして、議論を進めてまいりました。

その議論の結果がこの概要版のところに示されているわけですが、私たちとしては、まず札幌市として、小中一貫した小中連携した教育、これは一体何を指すのかというところを明らかにする必要があります。第2章のところをご覧くださいますと、知・徳・体の調和の取れた育ちというところがあります。やはり、知・徳・体の調和をとっていくことについて、小中一貫して行っていくことが重要ではないかと考えました。

またさらに詳細に4つの視点から、それらを細かく示しました。

小中一貫した教育の推進についての4つの視点を、資料にまとめていますが、9年間を通した子どもの学びのつながり、子ども理解、生徒指導の連続性、子どもだけではなく、教職員が連携・協働。また、4番目には、家庭や地域との関わりもこの小中一貫した取組の中では、重視していくべきではないかというような話があって、それをまとめているのがこの方針です。

ただ、こういった重要な視点を示したところで終わってしまうと、札幌市の現状からいきますと、なかなか先ほど申し上げたように学校が主体的に取り組んでいくことを後押しすることになりません。その1つの大きな課題が、先ほども少し申し上げましたが、札幌市の小中学校の校区があまり一致していないことです。資料3をご覧ください。これはお読みいただいて、すでにご存知かもしれませんが、札幌市は、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプ3つの小中学校の関係性がございます。

一番分かりやすいのは、Cタイプですけれども、Cタイプは、1つの中学校に1つの小学校。子どもたちが皆さん、小学校から中学校に一貫して進学していくと。これが、札幌市の場合は6地区しかありません。

一方で、Bタイプは、小学校と中学校の校区は概ね一致していますが、小学校から中学校に行く際に、小学校3校、2校、複数校に跨っているというケースがあります。これがBタイプ、これは25中学校区あります。

その他の大半66については、1の中学校と複数の小学校において、校区が整合しておりません。

したがって、小中一貫と言っても、中学校・小学校で子どもたちが自分の行く中学校の先生方と必ずしも連携できるというわけではないという複雑な事情がございます。

現場からは、こういった校区の不整合がある中で、小中一貫した教育を進めるといっても、どのように進めるべきか、連携先が多くて対応が難しいというような悩みを聞いておりました。

そこで、私どもが考えたのが、パートナー校という仕組みであります。子どもたちは、必ずしも1つの中学校に行くわけではないのですが、一貫した教育を進めるためには、中学校と小学校がどこか手を組んで、重点的に取組を進めるということ、1つでも決めなければ先に進まないだろうということで、教育委員会のほうでパートナー校の組み合わせを決めました。

もちろん校長先生方のお話も聞きながら調整をしましたが、概ね校区が一致しているところを中心に、またこれまでの経緯を踏まえて、つながりの深い学校をパートナー校として設定しました。これは、私どものパートナー校の基本的な考え方になります。

また、お手元の資料2、パートナー校の説明の下に、緑色で囲まれた2つの柱というものを示しております。

先ほど申し上げたように、学校にお任せしていく点と、札幌市教育委員会としてリーダーシップを発揮する点という考え方で、私ども、どのパートナー校においても、少なくともこれだけはというものを定めることにしました。

「札幌市の小中一貫した教育というのはどういう取組なんですか」と言われた時に、「この2つの点が柱になっていますよ」と言えるようなものを明確にしないと学校も困るし、子どもたちも何だかよく分からないということになりかねないということで、私ども考えましたのが、課題探究的な学習をどの学校、中学校区でもパートナー校で連携してやっていくこと。

もう1つは子どもたちの理解をしっかりと進めていくこと。この2点が必ず行われるべきではないかという提案を差し上げました。

ですから、札幌市のパートナー校においては、この2点について、必ず取り組むということにしております。

ただ、これだけだと各学校の地域性、あるいはこれまでの取組といったものは活かされない可能性もありましたので、「パートナー校の特色を生かした取組」の推進も併せて示させていただきました。

いくつか例を上げましたが、例えば地域の中で合唱を大事にしている地域があれば、小中一貫した教育の中で合唱に力を入れていただいて、それも魅力として発信してはどうでしょうかといったようなことです。

詳しくは方針にかなり詳細に書いておりますので、あとでご覧いただければと思います。

それと札幌市教育委員会として、この取組を後押していく上で、外せない視点として働き方改革というものがあります。この方針を、学校にお示しする前段階で、検討委員会の中で話題になったのは、新たな負担が増えるとこの取組は進まないだろうということでした。

私どもが考えたのは、新たな取組を行う上では、当然最初のスタ

ートアップの時には負担が増えるのは間違いないだろうということです。ただ、その負担を担ってくれるような人材を派遣することで、そこをカバーできないかと考えたのが、小中一貫した教育を支えるコーディネーターの配置です。

資料4に小学校と中学校の例を挙げていますが、真ん中にコーディネーターがいて、この方が、会議を調整したり、あるいは計画づくりを支援したり、あるいは会議の司会進行をしたりなどといったところをまずは最初の2年間関わっていただくこととしました。

そこでできた仕組みが、その後継続的な取組に生きるのではないかとということで、仕組みづくり、組織づくりを後押しするような取組をしていただきました。

例えば、「モデル校の取組について成果はありましたか」というご質問を事前にいただいていたのですが、こちらは各学校で、これは小学校と中学校の先生方に混ざっている様子です。(写真提示)このような会議を教頭先生がコーディネートするとまた教頭先生が大変になりますので、コーディネーターの方にこういう会議の場を設定していただくとか、話し合いの中身をコーディネートしていただくといったことをしてきました。

ちなみにこれは特別支援教育に関する部会、こちらは算数・数学の教科の先生方が集まって勉強会をしているという事例です。

これによって、各教科でどのように系統的に進めていけばいいかということで検討していただいたところです。

例えば他にもこのように(資料提示)、目指す子ども像を小・中学校で共通化する取組、あるいは小・中学校の3つの行事予定が並んでいるものですが、こういった一覧をつくってそれぞれの行事のつながりを明らかにして調整していく取組。あるいは、7年間の総合的な学習の時間を通して、小・中学校を通じて、どのような力をどう育んでいくのかを一覧にして、そしてまたこれを使いながら、新たな取組を整理していくと、このような取組が進められているところです。

今、各学校でこういった取組を進めていますが、私どももいきなり97校区、全てにコーディネーターを配置というのがなかなかできないものですから、まずは半分の48校区にコーディネーターを配置して、令和2年度から取組を進めております。令和3年度からは残りの学校も含めて、97校区全てで取組を進めるということ、コーディネーターも増員する予定であります。

学校側からは、コーディネーターが大変よい役割を果たしてくれているという話を聞いております。

今後のスケジュールということで、お尋ねをいただいております。今申し上げたように令和4年度から全面的に小中一貫した教育を実施していきます。

また、これもご関心がおありかなと思いますが、第7章のところに、小中一貫校の検討についての考え方を示しました。

子どもの考え方としては、最初に結論を申し上げますと、施設分離型では小中一貫校というものをつくる方向性にはありません。基本的に小学校と中学校と校区が概ね一致していることや、子どもが校種を越えて、いつでも安全に交流できること、また教職員が話し合いや計画づくりなどを日常的に一緒に行える。こういった環境が整わなければ、小中一貫校と名乗るということはしないと。小中一貫した教育は全市で取り組むけれども、小中一貫校については条件が整った時に考えると、こういった方針となっております。

この方針をつくってパートナー校を決めて取組を進めると打ち出した効果ということになるかと思いますが、実は義務教育学校の設置を進める動きが加速しております。私たちは、教育課程担当課ですけれども、施設担当の課ですとか他の課も、この方針に基づいて、急速にまちづくりの一環として、義務教育学校を設置するという動きが、今進んでおります。

具体的にもうすでに3校、義務教育学校にするということを議会でも説明をするなどして、取組が急速に進んでおります。この方針をつくった意味、パートナー校を設定した意味、こういったところが将来の義務教育学校の設置に貢献しているといったところもあるかなというふうに捉えております。

以上が私からの説明の概要でございますが、子どもの意識調査について、小5、中2で行っていて、これについてどういう考え方かということでご質問ありました。

簡単にご説明させていただきますと、小学校5年生と中学校2年生、毎年12月頃に全員対象の学習アンケートを行っております。

これはいわゆる学びに向かう力につながるような内容を、子どもに自己評価の形で行っておりますが、全国学力学習状況調査だけでは把握できない学び方などがあるだろうということで、平成25年度から実施しております。平成26年度から、この調査結果を踏まえながら、全校に学ぶ力育成プログラムというものをつくってもら

って取り組んでいただいています。いわゆる学力向上施策と言いま
しょうか。

例えば全校にプログラムというものをつくっていただいています
が、これに評価結果を反映するといったところで、PDCAサイク
ルを確立するということです。

それと小5、中2で実施しているものは、小6が中3になったと
きに、その子どもたちにこの施策が反映されるようにしようとい
うことで、中3の終わりにするとかそういうことではなくて、この時
期に行っているということでございます。

「成果というものはありましたか」というお尋ねがありました。

特に、意見の違う人ともよく話し合うという項目で、平成25
年度から令和2年度の変化を見ますと、小学校で9.1ポイント肯
定的な回答はアップし、小中一貫につながるかと思いますが、中学
校で17.1ポイントアップして、小中学校の差が段々なくなって
きているなというところで捉えております。

私からの説明は、一旦ここで終わらせていただきます。何かご質
問あればいただきたいと思えます。よろしく申し上げます。

座長 ありがとうございます。

ただ今の札幌市様からのご説明に対して、ご質問等あればお願い
いたします。

構成員 小中一貫のコーディネーターを配置しているというお話について
なんですけれども、コーディネーターの方は一般の教諭でしょ
うか、それとも教育委員会の方なのでしょうか。

札幌市 コーディネーターの方は、教育委員会がお願いしているボランテ
ィアになります。ボランティアと言っても、元校長先生を中心にし
て、学校のことをよく知っている方です。

元校長先生なので、学校や地域のことをよく分かっていただい
て、大変よい取組をしていただいているというふうに聞いて
います。

構成員 ありがとうございます。

ではその元校長先生というかそのコーディネーターの方は、所属
はどこになるんですかね。小学校と中学校と。

札幌市 所属は特に決めておりませんで、ただ中学校を中心として、お邪魔するというようなことが多いかなと思っています。

ただ、どの所属というのではなくて、「3校、4校を結ぶ存在として働いてくださいね」ということでお願いしています。

構成員 勤務は、あちこちの小学校、中学校に行かれたりということで、週の中で動いて行かれるという形になるのですかね。

札幌市 はい、ただ今年はコロナがあったものですから、なかなか在宅の時間もありまして、今のお答えに明確に「中学校にずっといます」というようなことでお答えしたいところなのですが、実際はなかなかうまくいってないところもあります。

構成員 分かりました、ありがとうございます。

座長 ほかに何かご質問があれば、お願いいたします。

構成員 札幌市教育委員会の皆様、私たちにこのような学習の場を与えていただきましてありがとうございます。

お忙しい中、大変資料自体も勉強になりましたし、今日のお話についても大変参考になります。

今後の私たちの協議の論点をお示しいただいたと思います、ありがとうございます。

お尋ねしたいことが、9年間の系統性・連続性のある教育を実現するために、小学校と中学校の先生方が、本市でもまだ課題なんです、それぞれの校種の違いを超えて、お互いを理解し合い、そして発達段階を9ヵ年で捉える中で、この系統性・連続性のある教育というのは考えられていくのかなというふうに思います。

札幌市さんの資料の中に、やはり札幌市さんも最初はお互いに交流する、お互いを理解し合う機会が少なかったために、その違い、どんなふうにお互いに理解し合うような場をつくられたのか。そこは教育委員会のほうで仕組みをつくられたことによって、理解し合う場が増えていったのか。あるいはモデル校でどんなふう、実際に小学校・中学校の先生方が、お互いの教育過程や生徒の発達段階を理解し合うような取組をなさったのか。

この点について教えていただけないでしょうか。

札幌市

ありがとうございます。私ども、基本方針は、今お褒めいただいたようにしっかりまとめたつもりではいますが、実際、小学校と中学校、明確に距離はあります。

小学校と中学校の先生方に、まずお互いにどのように教育を進めているのか、子どもの様子を見てもらうとか、あるいは一緒にテーブルを囲んで、お互いが悩んでいることや課題にしていることを共有していただく。

そして、どんな子どもたちを育てていきたいのか、15の春を見据えた取組、そういったところを話し合っていて、一緒にテーブルを囲んでいただくというようなことを、まずは大事にしているということです。

一例ですけれども、実は先ほど申し上げた読書の活動、小学校と中学校の先生方とテーブルを囲んでいるところにお邪魔したのですが、小学校の先生から中学校の先生に対して、「小学校では朝読書やっているんですよ」とか、「読み聞かせ合っているんですよ」と話をしたんですね。そうすると中学校の先生が「あっ、そうだったんですね、うちでもやっているんですよ」という話で、意外とつながっていないというのが現実です。そういったところから、まず分かり合っていく、知り合っていくこと。

先生方は忙しいですから、そういった場をつくっていくことがまずは大事だということを実感しました。

そこから先は、教員は優秀ですから、子どもたちのことを中心に置いてテーブルを囲んだ時に、先生方がいろんなアイデアを出したり、こんなふうにしようと思うと前向きに考えるというのが自然に生まれてくるものだないうふうに話し合いを見ていても思いました。

現実にもそこで、「小学校でそういうふうに行っているのであれば中学校ではこういうふうに進展させてみようかな」というアイデアが出てきたりしていました。

つまりは、お互いに理解を深めていくという場をもつことで、先生方も元々持っているポテンシャルがありますので、そこには期待できると思います。

全ての教員のことを教育委員会が舵取りをするという考え方ではなくていいのかなというふうに思っています。実際じゃあ一緒に小学校と中学校でゴミ拾いを同じ日に設定して、一緒にやってみよう

かとか、そういった小さな取組の中でも一緒に取り組む、協働する動きが出てくると。つまり、中で情報を共有して、次に協働するものが1つずつ生まれてきて、段々結びついていくんだらうなというふうに思っています。

構成員 ありがとうございました。

座長 私のほうからご質問ですが、小中一貫教育と、最後にちょっと話していただいた一貫校との関わりなんですけれども、小中一貫教育というのをパートナー校で進めていくということでも成果は上がっているが、やはり一貫校で実施、進めていくことのほうが望ましいというか効果はさらに上がる、日常的な交流とかができるとかという条件があるのでということになるのだと思うのですが。

これは、義務教育学校の設置が加速しているというか、進んでいるというのは、この辺の議論というか、例えば、小中一貫で設置をするよりもやはり義務教育学校のほうが望ましいというのが、議会や札幌市での判断であるということでしょうか。

札幌市 その点はちょっと難しい説明になりますが、私たちは小中一貫した教育を進めることがまずは重要であるという捉えがあります。

ただ、施設が一体になっている場合に小中一貫した教育がさらに充実されていく、あるいは新しい形が生まれてくるという可能性があります。必ずしも、全ての学校が義務教育学校になるべきだとか、それが一番だというふうには考えていません。

ただ、条件が合ったところについては、小中一貫校にして、そして小中一貫した教育で、札幌市全体に何かこう新しい可能性を示してくれるような新たなモデルを示してくれるような取組をしてくれたらいいねというような意味合いで捉えています。

これは義務教育学校が出たらとベターだ、ベストだという考えではなくて、そういう1つの校種を選択する余地もあるよねと、そういった位置付けにしております。

座長 ありがとうございました。その他ご質問なければ、これでこの議事を終わりたいと思います。札幌市様、どうもお忙しい中ありがとうございました。

続きまして、論点等について、になります。事務局のほうからご

説明をお願いいたします。

根橋計画調整担当課長より説明【資料3】

座長

ありがとうございました。

本日のヒアリング内容や論点等について、意見交換を行います。遠慮なくご発言等いただければというふうに思います。

特に今日は札幌市のヒアリングを行っておりますので、それらのご感想だとか最初に出していただけるといいかなと思います。

札幌市も最初にあったように、令和2年2月に基本方針を出して、この間1年でかなり動いて、中教審も含めて今日の議題で説明があったように動いてきているので、札幌市も1年前の基本方針を出すけれども、義務教育学校の設置だとか、要するに基本方針を超えて、議会だとかで設置が進んでいるというような状況になっていますし、今日の資料でいうと、教員の配置等や免許のことに関しても、中教審のほうで出てきているというのは、私たちとしては、付け加わっている情報ということになりますので、後発型というか、今進めている私たちからすると、一貫教育だとか、あるいは一貫校も視野に入れながら少し考えていくような方針というか、そういうものが作成できたらというふうに思っています。

札幌市の感想等からご自由に出していただければと思います。

この資料3や資料4についてのご意見でも構いません。ご自由をお願いいたします。

構成員

あとで札幌市の事例の感想も含めますが、まず論点1のことを話したいと思います。本当に構成員の皆様からいろんなご意見があって、そして事務局様もすごく分かりやすくまとめていただいているので、その中で更にその修正とか追加とか本当にあるのかと思うくらいにまとめていただいているのですが、その中であえてすごく細かいところになるかと思いますが、先ほどのご説明の中で、小中連携教育と小中一貫的な教育などの定義や違いなどについて、分かりやすくまとめていただいていると思いますが、定義が異なっていく教育活動や体制が異なれば、意義や期待される効果も異なると考えられます。

しかし意義のところだけは、小中連携一貫教育を分断させずに、記述している印象を受けています。それぞれ期待される効果といっ

た部分を整理すると、より分かりやすくなり、各校区の実態に応じて、より目指しやすくなるのではないかというのは1つの感想です。

これを踏まえてその意義の整理について、もう1つ述べさせていたいただきたいのは、ここでぜひ北九州ならではの意義を整理していただきたいということです。

実は、構成員からのご意見の2つ目、6つ目、7つ目は前回会議のあと、私が事務局様に送ったものですが、それも含めてもうちょっとまとめさせていただきますと、国が整備した小中一貫教育の意義、例えば、学力向上、中1ギャップの解消などのみ記述した場合は、これまでと変わりなく、先生方は小中一貫教育の大事さが分かっている、それを優先させる思いまでは、という恐れがあるのではないかと考えています。

北九州市ならではの意義を整理し、かつそれに適した目標を設定した場合は、先生方はより当事者意識を芽生えやすくなるのではないかと考えています。

もちろんだのように記述すれば先生方がやりたくなるような小中一貫教育になるかについて、現場の先生方のご意見は伺うべきかと思えます。先ほど札幌市の事例を通して感じたことは、子どもの具体的な姿の変化を、すごく把握している点です。

例えば先ほど話の中にあっただ子どもの意識調査を行うことで、小中連携の成果と課題も析出しているようです。

こういった調査・結果から見えた子どもたちの変化や成長こそ、先生方を動かす原動力になるのではないかと考えています。

論点1については、以上です。

すみません、すごく細かくていちゃもんをつけるような感じがしていますが、そんなことは全くありませんので、ご検討いただける範囲でお願いします、以上です。

座長 ありがとうございます、他にありませんか。

構成員 先ほど説明があった一覧表、小中一貫・連携教育に関する整理ですね。その中で、今回出てきたのは、制度化された小中一貫教育校、それから気になっているのが、右から2番目の狭義の小中一貫的な教育を行う学校と、その左の併設された小中一貫教育校。違いがよく分からないということと、もう1つおそらく違いはないと思うのです

が、あえて狭義の設定をしようとしている意図はということですかね。

事務局 併設型の小中学校の場合は、基本的に学校教育法施行規則で定められているものを考えておきまして、教育委員会規則等で規定をする必要があります。

それと、ここにそこまで書けばよかったですけど、併設型なので、基本的に例えば2小1中とかで完全に閉じているような形のことを念頭においています。

一方で、その狭義の小中一貫的な教育を行う学校については、特に教育委員会規則等で定めるというようなことまで考えていないということと、例えば基本は2小1中ですが、例えば別の小学校から、5、6人ぐらいだけ来るとか、そういうようなものも含めて考えているというふうなところでございます。

事務局 そういう形態でこういうふうに分けてあるということだと思いますが、実際は学校にとっては、要は小中一貫教育校を進めていくのが大前提でありますけれども、それを大前提に、例えば、より一貫的なものに迫ろうというのが左側のほうですね。

そして、右のほうは、環境的に屈折的にいろんな条件が重なってそれはできないと、できにくいというところについては、一応言葉としては小中連携教育という言葉だと思っただけですね。ですから、それを規則として位置付けるというところに、学校の体制としてしっかりあるのかどうか。逆に混乱しちゃうのかなと思っただけで、これは意見ですが、この間もおそらく、右から2番目の場合は、今のように1番ここが来るとか、いろいろな条件の場合に、果たして小中一貫ができるかとかいう議論になると思うんです。

そういうところで、例えばそういうところは1番右側のほうでやっつけていこうとかいうようになるので、結果的にはここは1番右から2番目とそれから3番目、ここは一緒に考えたほうがいいのかと今のところ考えています。

それから2番目の囲みですが、おそらくこれを進めていくには、北九州市もいろんなタイプがあると思います。1番の柱と思うのは、おそらくモデル校などを設置して、おそらく小中一貫校、私もいろいろ経験ありますが、やはりステップがあるんです。第1の段階、第2の段階、第3の段階、第4の段階とか、前回の宗像市など

もそうですが、佐賀県も私関わりましたが、まずは今、現行の小中連携的な部分、そしてやはり要素として、目標をもっと教育課程分とそれからあとは地域連携とか、それによってレベル1の段階ではこれぐらいと、2だからこれぐらいとか、3ではこれとか、そんなことが整うと、最終的には左側の施設一体でもあるし、施設分離でもいいのですが、小中一貫教育のここに進みますよというような、絶対それは必要だと思うんです。その辺りをするためには、やはりモデル校を位置付けて、その研究をしながらで、早くつくらないと進まないのかなというのは意見として考えています。そこら辺の体制づくりをしていかないといけないなというところが2つ目。

3つ目は、間違いなくコーディネーターというのは、これは実は近隣でいくと宗像市とかそうだったんです。最初は平成19年に立ち上げたのですが、コーディネーターがいなかったんですね。

やはり学校の、特に教頭先生や主幹の先生とか、その辺りがものすごく大変な思いをして進めました。25年から、「地域とともにある学校」ということを進めながら、コーディネーターを退職校長先生になってもらいました。

そのことによって、さっき札幌も言っていましたが、元校長で非常に経営的な部分も持っていますから。この辺りの教育委員会の体制、これをはっきりさせておかないと、大事だなと思います。多分、校長先生方もその辺りをものすごく感じているところかなと思います。

それから4点目、小中一貫の多分2小1中とかやった時に、これはまだ宗像でもいろいろ議論が飛びかっただけなんですけど、当時は当番になっていた。要するに2小1中で校長先生がいて、事務局で誰かがリーダーにならないといけないので、各校区にお願いをしていたんです。だからバラバラだったんです。

途中から教育委員会の決定として、人事も兼ねて、例えば、来年度は、A校区のC小学校の校長先生たちの責任として進めてもらうとかいうようなところをしているところと、もう学校に任せるところとバラバラあるんです。

その辺りも教育委員会の考えるところですよ。その辺りを整理しておかないと、非常に難しいですね。ですから、札幌市さんも言ったけど、もう始めているところは、もう本当に頭は2人でなくて1人のほうがいい。義務教育学校というように進んでいるのが、今日本の動きなんです。トップが2人いると推進というのは難しいん

ですよね。

もちろん弊害もあります、義務教育学校の場合は、特殊性があって、自分たちで教育課程を独自に変えられますが、なかなか理屈では分かりますが、実際はそういうのはできないのでやはり難しいのかなと。

僻地校とかそういうところは、この義務教育学校に向いています。が、そういう課題を抱えながらもやってみて、その辺りの部分は教育委員会のほうで整理されたらと思います、以上です。

座長

ありがとうございました、他はいかがでしょう。

オンラインご参加の構成員の方々から何か感想でもご意見でもあればお願いします。

構成員

すみません、本日はオンラインで参加させていただいております。

まず札幌市の話を受けての感想なんです、札幌市の資料2で見ました、「小中一貫教育の目的」というところで、4つの視点に分けて考えられているというところで感じたところは、この小中一貫教育の目的、札幌市が定めておりますが、これがやはり全国的に目的として今後進めていかないといけないところなのかなというところは私も感じました。

これをもとに、本市の論点2の部分にはなってくると思うのですが、現在、私、中学校の教員でありながら小学校に入っているという現場の立場の意見で話をさせていただきますと、まず9年間の学びのつながりですね。

その部分は取れているのかなと思ったのですが、一方、ちょっと感じているのが、現在、小学校のほうで私が授業を担当しているのは、6年生から3年生までは体育の専科で授業を担当しております。

小中連携という立場で考えたのであれば、正直3年生、4年生の専科の授業はかなり疑問で、3年生、4年生に対する授業で、果たして、「小中連携なのか、中1ギャップの解消になっているか」というところは未だに疑問を感じていて、この点は正直、小学校の先生方の業務改善が大きいのかなというところを思っております。

今回、5年生、6年生に授業をしている時に、一応「中学校からはこういうふうになるよ」というところも話をしたりだとか、より

中学校向けに近付けた授業というところも展開しているのですが、正直、私がいた中学校は、今の小学校とは校区が別なので、「その授業は、そのまま今の小学校の子どもたちが上がる中学校のルールで通用するのか」と言われたら、やはりそこにも疑問があります。

なので、もう少し私のような立場の人間が、実際に校区間で連携ができるべきじゃないかなというところは感じていて、今年度コロナの影響もありますが、私、大蔵小学校ですが、一度も大蔵中学校の先生とお話をする機会がありませんでした。

なので、生徒指導の統一化だったりとか、より子どもたちが中学校に上がった時に、学校の行事の在り方、部活動の取組の仕方なんてところは話ができなかったので、今後は年度当初にもう少し私のような立場の人間が、中学校、小学校を行き来して、より連携のしやすいような環境整備というところも、子どもたちのためには必要なかなというところを感じております。

それと体育で説明すると、例えば授業の号令の仕方だったり服装のルールなんかは、今、中学校の体育の先生と個人的にやり取りをさせてもらっていますが、そういうところも小中連携になるのかなというところは感じているので、もっともっと私自身も勉強して、今後取組を変えていく必要があるのかなというところは感じました。

すみません、感想になりますが。以上です。

座長 ありがとうございます。その他、感想やご意見等あれば。

構成員 今日の札幌の状況というのは、本市ともかなり似通っているところがあって、すごく参考になるのではないかなというふうに思いますし、この基本方針に関しましても、教育委員会のほうが「教員の働き方」というところにも目を向けていただいた上で、基本的なものを作成していただいているということに、非常に感謝申し上げたいと思います。

先ほどおっしゃいましたけれども、現場から言うと、子どもの姿が変われば、教員の負担感というのはちょっと減るのかなと、僕も現場に勤めながら思っておりました。私は小も中も勤務をさせていただきましたので、その両方の意識改革というの、数年前に比べるとずいぶん変わってきているのかなというふうに思います。

以前は、やはり小学校、中学校の壁というのを非常に感じていた

ところですが、ここ数年交流も増えてきており、それぞれの立場・やり方の理解というのも、以前に比べるとずいぶん理解ができてきたのではないかなと。情報交換も、以前に比べると頻繁に行われるようになってきたのではないかなと思います。

その上で、今後進めていく中で、この小中一貫とか、小中一貫的な取組を進める中で、「どういったゴールにするのか」というその姿がはっきりと教員のほうに見え、そして段階的にはあろうかと思いますが、「何をすべきなのか」ということが明確になれば、我々は動きやすいのではないかなというふうに思っております。

また、そこにはコーディネーターという役割の方を入れていただくことで、その計画がスムーズに進むのではないかなというふうに感じます。「何をどのように、いつどこでやるか」という計画の調整だけで莫大な時間が取られまして、なかなか進みづらい。特に今年度はコロナの影響もあって、小中間の校長の連携もなかなか取りづらいところがあった点もございますので、そういったところも含めて、一元的にコーディネーターの方が取り仕切っていただけるとなると、そこは現場の先生方も参加をしやすくなってくるのかなというふうに思います。

ちょっとまとまりませんが、札幌の事例なんかも参考にさせていただきながら、トップダウンとそれからボトムアップというのをうまく組み合わせながらいくのが一番効果的ではないかなというふうに感じました。すみません、感想です。

座長 ありがとうございます。
 次の構成員の方、よろしくお願いします。

構成員 今日は札幌市の紹介をしていただき、大変参考になりました。ありがとうございます。
 小中連携ということで、現場では小中のそれぞれ生徒指導や学力の面で連携を取るということの必要性は感じて、連携はしておりますが、それが先ほどご意見にありましたが、「どのようなゴールを目指しているか」ということがなかなか共有できないところも課題かなと思っております。
 ただ最近、本当に中学校教員に小学校に来ていただいて、中学校文化と小学校文化の交流を施策的にもしていただいたりすることとはとてもありがたいかなと思います。

今日、札幌市の紹介があった時に、資料2のような一目でこの取組が分かるということが、とても現場にはありがたい資料でした。

北九州市でも基本方針を出して、文言を書きいただいています。このような札幌市の資料2のようなものがあると、現場で共有、小中一貫の教育が共有しやすいのかなというふうな思いがあります。

感想です、以上です。

座長 ありがとうございます。その他の方がいかがでしょうか。

構成員 ちょっと付け加えさせてください。

私はずっと関わってきて、やはり先生方の一番の思いは、小学校の先生であろうと中学校の先生であろうと、今日もちょっと言葉が出ましたが、15の春の姿を共有できることなんです。もちろん卒業式に行ったりするけれども、要するに15の春をみんなで送れる。これってものすごく小学校の先生はやりがいを感じるんですね。だからもう負担とかも消えまして、そちらの嬉しさですね。

だから皆さんがおっしゃるように、やはり子どもたちの最終の姿、これが要するに目指す姿。

今、私が意識しているところでは、国の調査でも、小中一貫とか小中連携を進めているところでも、まだ35.6%しか、そういう目標像を設定していないという現状なんですよね。ですから、やはりそこはものすごく大事かなと思います。

ただ私もなかなか伝えるのが難しくて、最近は私、コミュニティ・スクールを進めています、地域とともに。要するに、「保護者や地域の皆さんと一緒に9ヶ年で育てましょう」ということを言った時に、どっちかという、9ヶ年で育てる教育のほうが、よく保護者や地域の方は理解してもらえるんです、とにかく9ヶ年で子どもたちを育てましょうよと。もちろん幼稚園まで入れれば12年ですが、「小中一貫教育をしましょう」と言っても分かっているのかなという印象だったんです。

「連携とか一貫とか何」といつも言われるんです。それは形態論でありまして、私たちが求めているのは、9ヶ年で子どもたちを育てましょう。だから9ヶ年で育てる教育をやるやないかと。

その時にやり方としては、「環境的に、一体的に、一体としてやれる場合もあるし、連携としてやれる場合もあるんじゃないでしょ

うか」という形でいつもお話するんです。

そうすると、PTAのほうも、「それなら当然よね」、「じゃあPTAのほうも9ヶ年でPTA活動をやろうよ」とか言って、どんどん進んでいっているんですね。

ですから私、伝え方の難しさを非常に感じている昨今ですけども、ついでに申しますと、うちは教育大学なんですね。今、学部のほうの改革をしています。

つまり、学科なんかの免許状の関係がありまして、いち早くやらないといけないのだけど、ちょっと後手後手になっていきますけど、そこでも話題になっているのが、やはり大学の先生も、私も含めて「初等教育」とか「中等教育」と言うんですよ。だから「そのなのやめましょう」、「義務教育等中等教育でやったほうがいいんじゃないですか」って。「今は初等教育の時代じゃないでしょう」って言うと、最初は何か困っているんだけど「そう言えばそうやな」と、「もう今は義務教育の時代じゃないですか」って。だから、やはり意識改革というのは、とても大事なかなと思います。

大学でも、どうしてもこういう免許状の関係がありますから、もっと早くしないといけないですが、ちょっと頑張っ、今急いでいますので、含めて早く取り入れるように、「義務教育を基本として考えなさいって今、国が言っていることじゃないですか」ということで伝えているので、私たちもそこら辺りきちんと整理して、今のところは、僕は「9ヶ年で子どもを育てましょう」と、「育てる指導を充実させましょう」というのが一番いいのかなと思います。

最後に、3に書いてある5つ、非常に上手に書いてあるなと僕は思うんです、僕は賛成します。5つの中で、「上手に」というふうに言うのは、例えば3番目。これ平成20年頃の目標は、「中1ギャップ」と書いてあった。でも、「小中ギャップ」と書いてあるでしょう、素晴らしいかなと思います。

「中1ギャップ」の目標で宗像のほうは立ち上げたから、どうしても5年生、6年生、中1にメスを入れた。そしたら「小5ギャップ」が生じたんですよ。

だから、やはりこのように「小中ギャップへの対応」、いいと思います、ちょっとした言葉ですけど。やはりまだ先生たちは、小学校の6年生と、中1、「中1ギャップ」というのを意識するんですよ。

過去、そういうことはありました。今日もちょっと、札幌市もち

よっと言っていましたよね。これ「小中ギャップ」と使われているから、やはり当然「小学校1年生から全部9ヶ年を考えます」という、いい表現をしているなと思ったし、私はこれ大賛成ですね。

それから最後の、「9ヶ年を通じて地域とともに考えましょう」ということは、絶対ここは、北九州市は先導的にやってもらいたいなと思います。

まだまだ他のところは、口では「地域とともにある小中一貫校」で看板はありますが、内実はまだまだです。だから、スタートからそういう形で進んだほうが、絶対「急がば回れ」で早くなると思います。なぜかと言うと、地域、保護者が知らないで、「学校が勝手に小中一貫をしている」とかいうような形をつくるのが一番最悪ですからですね。

そういう意味で、今日ここにおられるメンバーも、地域代表の方もおられますので、そういう意味で、この1、2、3、4、5、大賛成です。特に3と5については、非常にここは感心しているというか、非常に嬉しいなというふうに思っております。以上です。

座長 ありがとうございます。その他いかがでしょうか。

構成員 札幌市のお話を聞かせていただいて、また資料等も読ませていただいて、とてもよく分かって、「このようにやっていけば進むんだな」というのをすごく感じました。

私、教務を5年間、今6年目をやっております、「小中連携教育」というのを実務的な立場で進めてまいったんですけど、やはりなかなか難しいところが多かったです。

資料4のほうで、「小中連携教育と小中一貫的な教育で想定される教育活動」のところの、教育課程の1番目のところに、合同研修会等に基づく中学校区内の学力・体力向上の状況の把握と書かれているんですけど、確かに中学校のほうに出向いたりとか、小学校のほうに来ていただいたりとか、そういうことを行ってきたんですけど、ただその状況だけをお互いに知り合うだけで、そこから「じゃあ、どうやっていきましょうか」というところまでが、なかなか進めなかったなというのが現状で、ただ共有して終わりというふうになっていました。やはり札幌市さんの、コーディネーターの方の役割というのが、かなり重要だなというふうに思いました。そこをぜひやってほしいなというふうに思います。

「小中連携教員」という立場の方が確かいらっしゃったんですけど、週に何回か交替して来てくださる方がいたんですが、なかなかそれが実務的には、申し訳ないんですけど、効果を発しているふうには感じませんでした。

もう1点、先ほどおっしゃったんですけど、やはり「誰がいつ何をやるか」というところが、学校現場の者としては、そういうことがはっきりしてないと、「どうしたらいいんだろう、こうしたらいいんだろうか」というふうに分からないので、基準というか、チャートというか、「こうやっていくといいよ」というものが明確に示されていると、どこの学校も取り組みやすいのかなというのを感じました。以上です。

座長 ありがとうございます。

他の構成員も何か、今日の感想やご意見等あれば、出していただければと思います。

構成員 今いろいろお話を伺っていて、何をもって小中連携がうまくいって、成功しているという、何か指標みたいなもの、「こういう姿」というところが、今までの皆さんのお話からも、とても大事ななどいうのはやはり感じました。

それで、全体で目指すものもあると思うんですが、やはりそれぞれの地域での特色を生かして、「うちではこのところに力を入れて、こういう姿になったら」というもの、先ほど「期待される教育効果」というか、そういう表現もあったと思うんですけども、その何か指標みたいなものがそれぞれに定められるといいのかなと思いました。

例えば「コーディネーターの設置率」とか、「合同研修が何回行われた」とか、「合同研修をこんなふうは何回はやっている」とか、量的なそういうふうになりがちですが、札幌市の事例で思いましたのは、読書のところで、非常にやはり具体的な数値で、「子どもたちが小学校でも中学校でも、こういうふうの数値が上がっている」というふうなことがありましたので、そういうふうな、やはり「子どもたちをこういう姿にしたいよね」というところの、何か質的な指標というのもとても大事ななど。

それから、それは、「全てにおいて」というのは難しいから、やはり特色をそれぞれ定めて、「うちはこのところに力を入れて、

ここまで持っていきたい」みたいなのが示されて、そこへ向けてのチャートというのができるといいのではないかなと感じました。以上です。

座長 ありがとうございます。その他、お願いいたします。

構成員 札幌市教育委員会の説明を聞かせていただいて、事前にいただいた資料も目を通させていただいたんですが、非常に我々、教育畑でない人間にとってもよく理解しやすい入りだったというふうに思っています。

その中で、4つの項目がありました。その中の1つとして、「家庭や地域との関わり」というのが入っていますよね。だから、そういう部分では、この一貫的な教育に地域で関わることの重要さというの、教育をされている先生方、皆さん大事に考えていただいているというところもありますので、ぜひ頼りになる地域とはなんぞやというところを、小さいところであっても、そういう話し合いが持てるような機会を、今から先もですね、逆にまだまだ受け身になっています、正直。学校からの協力要請とか、そういうものを待つスタンスというのはありますから、今回いろんな「話し合う場をつくっていこう」という形がありますから、その場の中でやはり有効に議論し合って、求められる姿、逆に「こういう支援がしてもらいたい」とかというような相談を受け止められる地域を、1つでも増やしていくという形を、今後は取っていったらいいのかなというふうに感じています。以上です。

座長 ありがとうございます。

構成員 まず1点、事務局にお尋ねがあります。

札幌市のほうではパートナー校を、AとかBとか決めたということでしたけれども、本市では平成25年、最初に基本方針を出された時に、すでに「この中学校とこの小学校」とかというふうにまとまりがつくられているんじゃないかと思うんですが、それについて何か問題があったりしているのか、あるいはその25年のままで、今もそれが、まとまって連携が進んでいるのかということも1点まずお尋ねしたいと思います。

事務局 基本的には中学校区の設定については、学校地域支援本部とか、そういうものでも設定をされていて、それを基に連携はされていると思います。そこの区割りについて問題があるかどうかという、個別の内容によっても変わってくるかもしれませんが、今のところ、そこに大きな問題があるとは考えていませんが、その子どもの数の状況とかそういうことも踏まえて長期的に言えば検討していく必要があるのかなとは思っております。

構成員 ありがとうございます。
ということで、札幌市のように複数で中学校同士も連携したとか、そういったことは北九州市の場合はないと考えていいですよ。

事務局 はい、現在のところですね、あそこまで数が多くなるとやりづらいのかなと正直ちょっと思うので、あまり形を推奨はしないほうがいいのかなと、「ああいう形で学校がやりたい」と言ってきた場合はいろいろと検討したほうがいいかなと思っておりますが、一応事務局、私のレベルではそのように考えております。

構成員 私自身もそちらのほうが分かりやすいグループになっていいのかなというふうに思います。

確かに、数人違う中学校に行くということが現実ありますが、本市の基本的な方針の中で学校教育が行われているので、ものすごく全然違うところに行くわけではないからですね。そしてそういうグループがしっかりしていることによって小小連携とかもう少しできたらいいいのかなと思うときがあります。

いずれ1つの中学校に行く小学校の子ども同士が、もっと小学校時代から行事を一緒にするとか、もし可能なら。1つの例として歓迎遠足を校区の近くの公園に2つの同じ中学校区にある2つの小学校が別々の日に同じ公園に歓迎遠足に行っていたというのがあって、今はコロナウイルスで人が多くなるといけないと思いますが、コロナウイルスが落ち着いたら、そういう時とよりの小学校の人たちも来ているというような、そういう小小連携もやって、積み重ねていくと、子どもたちの中の小中ギャップも少しでもハードルが下がるのかなというふうに個人的には思っています。

今日の構成員の皆様の話し合い、また、札幌市の教育委員会の話

し合いを受けても、本当に素晴らしい教育が展開していくといいなと思いますし、先生がおっしゃった9ヶ年というイメージというのは、とても保護者にも地域の方にもつながりやすいのかなと私もそれはちょっと思っていて、「〇〇中学校区9ヶ年教育」みたいな、その地域で、子どもたちを9年育てていくんだと。高校のスクールカウンセラーをしていると本当に9年間はしっかりそこにいて、その9年のあとは外に出ていくというイメージがとてもあって、9年そこにいる間に、15の春のところまでという、そのイメージはとても分かりやすいなというふうに思いました。

そういう何か理念というか、目指す姿があって、そして先生方がおっしゃっているように具体的に何をしていくのか、そしてそれが見えることによって、取り組みやすくなって成果が何らか示されて、本当に確実に確かなものとして、この9ヶ年の教育が現場に浸透していくというやり方ができたらいいなと思っています。

札幌市もごみ拾いをするのだなと思ったのですが、私が以前の会議で意見を述べたことは、今日の資料にまとめていただいていますけれども、やはり校区清掃1つとってもそれぞれの小学校とそれぞれの中学校で全く別々、同じ場所にながらも何か並行ごみ拾いというか、その交わることのないごみ拾い清掃をなさっている校区が本当にあったのをみたので、例えば「校区清掃したらいいですよ」ということの中に、それぞれの先生方がこれを通してどんな力を付けたいか、どんな経験を子どもたちにさせたいのか、そしてそれが結果的に9ヶ年を通した15の春に育てていくという、そういうところまでなっていくというのは本当に難しいことなのだろうと思います。

そう考えると、やはりモデル校があって、モデル校の先生方にしっかり理念が浸透して、具体的な方法が伝わって、そしてその実践が広がっていくというイメージが本当にいいんじゃないかと思いました。

それからステップが示されているということも、すごくイメージが付きやすいというか、こういうことができたら次にこんなことをやって、こういうこともできそうとか、まだ自分の校区では、この辺のぐらいからやってみようとか、より何をしたらいいのかというのが分かりやすいかなというふうに、先生方、構成員の皆様のご意見を聞いて思いました。感想です、ありがとうございます。

構成員

15の春ということで、そこに達した中で、不安は尽きないもので、次から次にまだ先のこと、3年後その後の4年後、また就職した時のことも考え、常に子どもに対してはいろいろな路線等を考えていきながら、いろいろな駅も考えていかないと思っております。

そうした中で、新たな連携というところの教育に一步踏みいった中で、これから考えていかないといけない部分じゃないかなと思います。

まずお願いしたいことは、地域・保護者の知らないうちに進まないでいただきたいということ、先ほどの先生の言葉もありましたけれども、そういった形で皆さんとこういう場を持ちながらトップダウンもしくは小1中1ギャップ、それから小中ギャップというような言葉をいただきましたけれども、まさしくそのように時代が変わっていく中で、やっぱり子どもたちの意識、そして子どもたちの学び方も変わっていているなとすごく感じます。

そして、この改革に伴いまして教頭先生の負担も大きくなるのではないかと、とにかく何かをすることに関してはすごいエネルギーがかかると思います。

そうした中で皆さんの負担軽減、そして我々保護者、そして地域の皆さんの連携、そして有識者の皆さんのいろいろな知恵をお借りしながら、負担軽減をしながら連携もしくは一貫を何とか形にしながら、札幌は読書というふうに言われていましたけれども、北九州はじゃあ何だといえるようなものを明確にしていきながら、ゴールを見据えて早期に進めていただければと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

座長

その他、何か言い残したとか、これまで発言しておきたいということがあれば、そろそろ時間がきていますので出していただければと思います。

構成員

先ほどの北九州の校区の今後をどういうふうな形で進めていくかというご発言がある中で、資料3の小中一貫教育の実施に伴い教育委員会として行うべきか分かりませんが、札幌市の事例を見て1つ感じたことは、これまでの会議の私たちの議論から、北九州の場合は校区の状況がとても複雑で多様であることが分かりました。

今後、この多種多様なものを、大きく何種類あるかなど整理する必要が可能であればあるのではないのでしょうか。例えば、札幌市

の場合は進学のパターンを境目として、その多様複雑な校区を整理しているのですが、そうじゃなくてもいいと思うのですが、他の何かの指標によって何種類かの校区があって、それぞれの校区をそれぞれパターン化した上で、それぞれパターンに応じて先進的な効果的な事例を提示することで、もしかしたら教育委員会による各校区への一種のサポートになるのではないかと感じました。可能な範囲でご検討をいただければと思います。以上です。

座長

ありがとうございます。

この報告書もどのレベルで、どこに視点を置いてまとめていくのかということを手探りしながら、国だとか先行自治体の事例がありますので、それをしながら皆さんに自由に意見を出してもらいながらまとめていくということになります。現実的に考えると、前回から少し議論になっていますが、札幌市のように校区、小学校と中学校の校区を前提としながら、こういうふうに関連して進めていくということになりがちなのですが、そうすると現実のいろいろ校区割りの諸問題とか、あるいは札幌市のこの報告書を参考にすればいいんじゃないかということにもなりかねないので、私たちは札幌でいうと、第7章で小中一貫校の検討ということで、いくつか校区が揃うだとかいうところから進めていきますというように、こういう形で9年間を見通した小中学校の設置というか、それに向けて整備を進めていくことが望ましいという、小中連携教育から小中一貫教育へ移行することが望ましいということ、はっきりと打ち出す必要があるのかなと、それさえ出していれば、あとは事務的に校区の作業だというのは、たぶん私たちが考えずに教育委員会のほうで計画的に検討していただければいいのかなとも思うので、その際に留意してもらいたことがあれば、皆さん意見を出されたようなことを報告書の中でまとめながらということだと考えると、札幌市が出している第7章で、これからの在り方について述べているということになります。第7章を私たちは中心に展開をしながら、第7章の今後に向けての部分が逆に、これから進めるにあたっては、こういうことに留意してもらいたいかという言い方の報告書のイメージもいいのかなと思いつつ今日は聞いていました。

最終的には皆さん方と確認をしつつ、事務局と調整をしながら考えていきたい、整理をしていきたいというふうに思いますが、概ね連携することによって、小学校・中学校の教育が充実するという方

向よりも、9年間を一体的に、あるいは9年間を見通した教育のほう
が望ましいというようなことが、国の答申の状況もそうですし、
私たちの意見も大体皆さん方もそうかなと思いますので、具体的
には一体校が望ましいとか、義務教育学校が望ましいよねとかとい
うことになるのかもしれませんが、現実のいろんな校区割りだとかい
うこともありますので、あるべき学校の姿、あるいは北九州が意識
して揃えていくべき姿というのは、どういうものなのかということ
をきちんと出していければいいかなと思います。

以上時間になりましたので、皆さん方ご意見どうもありがとうご
ざいました。それでは、事務局には本日の意見をまとめて検討を進
めていただきたいと思っております。

続いて、次回のスケジュールを事務局からご説明お願いいたしま
す。

事務局

資料5の今後のスケジュール（案）をご覧ください。

第4回目の会議につきましては、4月下旬ごろを予定しておりま
す。また、日程調整のほうをさせていただければと考えておりま
す。

本日かなりいろんなご意見をいただいています。事務局のほう
で、基本方針に盛り込むべき内容を文章化してまとめご提示をした
上でご議論いただいたほうが、いい段階になっているのかなと思
いますので、まず座長に、事務局でつくった案をご相談させていた
だいて、その上で皆さん方に送らせていただくというような形で考
えております。以上でございます。

座長

皆さま方、今日はこの議題について、また関連していろいろとお
気づきのことがあれば出していただきながら、今日資料にあったよ
うに論点のところに関連する意見をまとめたり、類型だとかとい
うのが分かりにくいので、説明をしてください、こういう説明が準備
できました、それでも分かりにくいのでということで、先ほどご意
見も出ましたが、比較表みたいな図でつくってくださいとか、いろ
いろとやり取りをしながら皆さんがお気づきのことをいろいろと引
きずり出せるように、会議の準備だとかということは進めていきま
すので、今ありましたようにスケジュールだとか今後の内容につい
ても、事務局とやり取りをしながら準備にあたっていこうというふ
うに思います。どうもありがとうございました。

最後に教育長から、本日の構成員の発言等に関して感想などお話し
いただきたいと思います。

教育長

座ったままで、申し訳ございません。

本日は座長をはじめ皆様、貴重なご意見を、また熱い議論をあり
がとうございました。

この1年、本当にコロナ禍の中で、学校の現場は非常に変わって
まいりました。学校だけではなく、とにかく世間の学校に対しての
視点がずいぶん大きく変わったなと思える点が、この義務教育期の
9年を見通した教育の重要性というのは、市民あるいはマスコミか
らも再度見直されている部分があるなというふうに感じておりま
す。

このコロナ禍の中で、学校というのは学習面というふうな面だけ
ではなく、いわゆる生活面、福祉的な側面が非常にクローズアップ
されたという1年であったと思います。

例えば、子どもたちの心の悩みの問題だとか、あるいは不登校だ
とか、あとはヤングケアラーという言葉が今盛んに言われています
が、家族の問題あるいはいじめだとか、子どもたちの経済的な問
題、貧困率の高さとか、そういうのがどうしても学校に、その課
題、しわ寄せが来ているという部分では、学習面ではなくて福祉的
な側面というものが、非常に大きくクローズアップされた1年だ
と思っています。

そういう意味では、義務教育期を通して一貫した視点でなけれ
ば、子どもたちを育てていくことができないということは、世間一
般も認めている部分が大きいなというふうに感じている、この1年
でございます。

実はこの会議の事業名、来年度予算の中に小中一貫教育の検討を
しますという事業名を立ち上げています。

そうしますと、今議会中なのですが、議会筋からも非常に注目が
高く、「自分の知っているどこどこでモデル校を設定したらどう
か」だとか、そういう話まで一気に言われる議員さんもいらっしや
りたりして、それこそ札幌の例ではないのですが、ステップを踏む
前に前のめりな市民の方も出てくるのかなという気もしているところ
でございます。

先週末、何日か前に福岡県下で香春町のほうが、具体的に4小2
中を統合して香春思永館という義務教育学校を、この4月にオープ

ンするという記事が出ております。おそらく、ここもボンと記事には出ましたが、どうも話を聞くと4年も5年も前から地域の方々と、まちづくりも含めてステップを踏んで、この義務教育学校のオープンにたどり着いたというふうにも伺っていますので、やはり地域・保護者の方を巻き込んで、この小中一貫教育というのは、話を進めていかないと、結局学校現場だけの思いだけでは、子どもを育てられないという時代に本当になってきているなということを実感しているところでございます。

できるだけ、北九州市らしさを出しながら皆様からのご意見を参考に小中一貫教育というものを検討してまいりたいというふうには今日つくづく思ったところでございます。本当に熱いご議論、ありがとうございました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

座長

ありがとうございました。

本日の議事は以上とし、進行を事務局にお返しします。

事務局

ありがとうございました。

最後にお知らせでございます。

本日のご意見につきましては、会議の議事録を公開いたします。市のホームページで掲載する予定です。議事録の全体の確認は、座長にお願いをいたします。

最後になりますが、本日の会議の発言で修正が必要な点や本日までご発言できなかったご意見などございましたら、3月24日までに電子メールかお手元の意見聴取表にご記入のうえ、FAXいただければと思います。

それでは、これをもちまして第3回の会議を閉会させていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。